

多言語・多文化社会における地球市民性の醸成に向けた
機能的クリップ ESD 教材の開発と活用
—筑波大学附属坂戸高等学校の「国際科」の授業における教材活用を通して—
Development and Application of a Functional ESD Clip Material
for Establishing Students' Global Citizenship
in Multilingual and Multicultural Society:
Through a Practice of International Studies
at Senior High School at Sakado, University of Tsukuba

工藤 泰三*, 建元 喜寿*, 吉田 賢一**, 佐藤 真久***, 村松 隆****

KUDO Taizo*, TATEMOTO Yoshikazu*, YOSHIDA Kenichi**, SATO Masahisa***, MURAMATSU Takashi****

*筑波大学附属坂戸高等学校, **慶應義塾大学通信教育課程,

東京都市大学, *宮城教育大学

〔要約〕本研究は、写真と文字情報を組み合わせた機能的クリップ教材の有用性を検証するため、ある総合学科の高等学校における学校設定科目の授業において同教材を用いた活動を試行し、その効果を測るために、受講生徒を対象としたアンケート調査を実施し、その結果について考察を行ったものである。この試行授業により、同教材には課題に対する生徒の統合性・文脈化を高め、生徒の変容を促す効果があると期待できることが分かったが、同時に、課題に取り組むために必要なスキルの向上のためには、教材開発だけでなく教員の指導法の研究・向上が必要であることが改めて示された。

〔キーワード〕国際教育, 教材開発, ESD (持続発展教育), 総合学科, 学校設定科目

1. はじめに：本研究の背景

筑波大学附属坂戸高等学校（以下「当該校」と言う）は、地域社会の担い手を育てるために 1946 年に学校組合立の学校として創立され、その後東京教育大学（現・筑波大学）への移管、学科の改変などを経て、1994 年に日本最初の総合学科高校の 1 つとして新たなスタートを切った。そしてその後、総合学科の特長を生かし、国語・数学などの普通教科に加え、農業科、工業科などの専門教科においてもさまざまな科目の開発・実践に取り組んできた。

当該校ではこれまでも各教科において持続的な発展のための教育（ESD）に取り組んできた（例えば石井（2005）、今野（2012）など）が、ESD においてはある事象を多面的に捉えることが必要であり、教科の枠にとらわれない形での取り組みの必要性が高まった。そこ

で当該校では校内委員会である国際教育推進委員会が中心となり、新たに学校設定教科である国際科を設置し、その中に「国際社会」「Discussion & Debate」「比較文化論」「Global Studies」の 4 科目を設け、教員・教科間の連携を図りながら国際教育・ESD の推進を行うこととした（工藤ほか（2012））。

このうち本研究を行った「Discussion & Debate」（以下「D&D」と言う）は、グローバル化が進み、日本においても外国との関係を見無視して諸相を語ることが不可能となり、それに伴って日本人同士だけでなく海外の人々とも意見を交換しながら協働することができる能力の必要性が高まる中で、日本社会に見られがちな単一性・没個性にとらわれず、他者の意見を尊重しつつ自らの意見を明確に表現することができる能力を生徒に身につけさせることを目的として開講されており、平成

25 年度においては 1・2 学期に日本語および英語によるディベート演習，3 学期に同じく 2 言語でのディスカッション演習を行ってきた。生徒たちは議論・討論を行う上での意見の構築の仕方を学ぶとともに，異なる意見に対して反論する手法を身につけてきたが，一方で「ある事象（問題）に対する視点が画一的になりがちである」「その事象（問題）が社会の他の事象（問題）とどのように関わっているかを十分に想像できない」などの課題もあった。なお，平成 25 年度の D&D 受講者は 2 年次生 7 名であった。

2. 研究目的および方法

平成 23-25 年度科学技術研究費補助金（基盤研究（C））『国際理解教育・国際教育協力のためのデジタル紙芝居教材の構築法に関する研究』（研究代表者：村松隆）で開発している機能的クリップ教材（以下「当該教材」と言う）は，話し言葉による参加型・対話型コミュニケーションを通して環境・経済・社会の様々な側面からある事象を捉え考察する力を育成することを目指したものである。具体的には，表に世界各地でとられた写真があり，裏にはその写真が撮影された場所，そこに所在する問題の項目，解説などが書かれている。そこで筆者らは，D&D における課題（上述）の解決に当該教材が有用であるという仮説に基づき，D&D の試行授業で当該教材を使用し，授業における生徒の様子がどのように変容するかを観察するとともに，生徒を対象に簡単なアンケートを実施して，生徒たちが当該教材を使用した活動についてどのような印象を得たのかを調査することとした。

指導計画の概略は以下の通りである。

【試行授業 指導計画（概略）】

1. 科目名：Discussion & Debate
（2 年次一般選択科目）
2. 対象生徒：2 年次生 7 名

（男子 1 名，女子 6 名）

3. 単元名：Finding “hidden” problems

4. 本時の目標

- a) 写真を見ながらグループで話し合い，そこに存在するであろう問題を発見することができる。
- b) その問題の原因として考えられるものは何かをグループで話し合うことができる。
- c) その問題を解決するためにどのような方法が考えられるかをグループで話し合うことができる。

5. 指導内容

<導入>（5 分）

- ・本時の活動の説明
- ・グループ分け
（3～4 名ずつのグループに分ける）
- ・ディスカッションのための写真を選ぶ
（10 枚程度用意しておき，その中から生徒たちが興味を持ったものを各グループ 1 枚ずつ選ぶ）

<展開>（20 分）

- ・グループディスカッション
（その写真に写っているものを見て，①その地域に存在する問題は何か，②その問題の原因として考えられることは何か，③その問題を解決するにはどのような方法が考えられるか，の 3 点について話し合ってまとめる）

<発展>（15 分）

- ・各グループによる発表
（まとめた 3 点について各グループが発表し，他のグループの生徒は発表を聞き，疑問点があれば質問する）

<まとめ>（10 分）

- ・担当教員によるフィードバック
（生徒たちが見落としていた点・欠けていた視点などについて指摘し，生徒たちの視野を広げる）

3. 活動の実際

試行授業を実施したのは2014年1月14日であったが、ちょうどこの時当該校にインドネシアのマタラム第一高校の生徒10名が交流目的で来校しており、そのうち3名の生徒が試行授業に参加した。したがって、当初は3名と4名のグループに生徒を分ける予定であったが、インドネシアの生徒を加え5名のグループを2つ作ることにし、それぞれに1名ないし2名のインドネシア生に加わってもらった。慣れない活動でいきなり英語を用いるのは負担が大きいであろうこと、そしてインドネシア生も母校で日本語を学んでいることから、使用言語は日本語とし、必要に応じて英語を補助的に使用させた。

グループAが選んだ写真はインドのアーメダバード郊外で水瓶を頭に載せて運んでいる子どもたちのものであった。日本では見られない光景に強い関心を持ったようである。一方のグループBはインドネシアのジャカルタ市街で多くの二輪車が道路を埋め尽くしている様子を撮影したものだった。バイクが道路上でひしめき合っている様子にとっても驚いたようである。下記にそれぞれのグループが写真を見ながら話し合った内容を記す。



図1 グループAの活動の様子

<グループA>

- a) 問題の所在：子どもたちが働かなければ

ならず、その子どもたちに十分な教育の機会が与えられていない。

- b) 原因：子どもたちが水を汲みに行かなければ生活ができない（貧困および社会インフラの未整備）。
c) 解決策：青年海外協力隊員などのボランティアが現地で子どもたちのための教育を行う。



図2 グループBの活動の様子

<グループB>

- a) 問題の所在：バイクの数が多すぎて渋滞を引き起こしており、大気汚染と労働効率の低下を招いている。
b) 原因：近距離でもバイクを使う人が多い。また、子どもから老人まで多くの人がバイクに乗っている。
c) 解決策：バイクに乗れる人の年齢制限を強化するとともに、鉄道やバスなどの公共交通機関を充実させる。

この生徒たちが話し合った内容を受け、担当教員から次のようなフィードバックを行った。

<グループAに対して>

- ・教育機会についてまで考えることができたことはとても良い。
- ・水を汲みに行かなくてもよい生活環境を

作るにはどうすればよいかについてもう少し深く考えてみるとよい。

- ・写真をよく見ると、子どもたちはみんな女子である。男女の教育機会の違いについても考えてみるとよいのではないか。

<グループBに対して>

- ・バイクが多いことによっていくつかの問題が引き起こされているという点に着目したのはとても良い。
- ・近距離の移動であれば人々がバイクに乗らないようにするためにはどうすればよいのかを考えてみるのも面白い。
- ・これだけひどい渋滞が見られる状況で公共バスを効率的に走らせることは可能であるか、どうしたら可能になるかについても考えるとさらに良い。

4. 考察

授業の最後に実施したアンケートの質問項目と集計結果は次の通りであった。数値は当該校生徒7名が4件法(「あてはまる」が4点, 「あてはまらない」が1点)で回答した数値の平均である。

表1 試行授業のアンケート結果

	回答の平均値
Q1: 活動の内容の説明を聞き、この活動で何をすべきかをすぐに把握できた。	3.7
Q2: 選んだ写真を見たとき、その写真がどのような状況を写したのかについて、自分の考えを他者に言えた。	3.6
Q3: 選んだ写真を見て、その状況の中にどのような問題が存在するかについて、自分の考えを他者に言えた。	3.7

Q4: 自分の考えを他者に伝えるとき、その根拠・理由を含めて説明することができた。	3.1
Q5: 自分と異なる見方をしている人に、その根拠や理由などについて質問することができた。	2.7
Q6: 自分と異なる見方をしている人の意見を、感情的に反発せずに聞くことができた。	3.9
Q7: グループ内で「問題の所在」「その問題の原因」「その問題の解決策」をまとめるとき、お互いに意見交換をしながら進めることができた。	3.1
Q8: グループ内で「問題の所在」「その問題の原因」「その問題の解決策」をまとめるとき、お互いに感情的にならずにスムーズにまとめることができた。	3.9
Q9: 他のグループの発表の内容を理解することができた。	3.9
Q10: 他のグループの発表を聞き、疑問に思ったことについて質問することができた。	2.9
Q11: 写真を用いた話し合い活動は面白いと感じた。	3.9
Q12: 文字情報を用いた話し合い活動より写真を用いた話し合い活動の方が積極的に取り組めると思う。	3.6
Q13: 写真を用いた話し合い活動は、他者との意見交換に役立つと思う。	3.1
Q14: 写真を用いた話し合い活動は、いろいろな情報を結び付けて考える力を高めるのに役立つと思う。	3.9
Q15: 写真を用いた話し合い活動は、ある事柄がある状況においてどんな意味を持っているかを考える力を高めるのに役立つと思う。	3.7
Q16: 写真を用いた話し合い活動は、理論立てて考える力(批判的思考力)	3.3

を高めてくれると思う。	
Q17: 写真を用いた話し合い活動は、自分の考え方をえたり豊かにしたりしてくれると思う。	3.6

回答数が少なく、また試行授業も 50 分のみであったので、統計的な信頼性には欠けるものであるが、今回の活動を生徒たちが概ね肯定的に捉えていることが分かる。

今回特に注目したいのは、Q14 と Q15 の結果である。Q14 から Q17 の質問は UNESCO (2012) で「配慮すべき視点」として挙げられている 4 項目を意識して設けたものである (Q14 : 統合性 (integration), Q15 : 文脈化 (contextualization), Q16 : 批判的思考性 (critical thinking), Q17 : 個人・社会変容性 (transformation)) が、第 1 項で述べた通り、D&D の授業では「ある事象 (問題) に対する視点が画一的になりがちである」「その事象 (問題) が社会の他の事象 (問題) とどのように関わっているかを十分に想像できない」という課題があり、前者は統合性、後者は文脈化に関わる課題である。これを踏まえてアンケート結果を見てみると、Q14 については 3.9, Q15 については 3.7 と、ともに高い数値を得られており、特に統合性の向上には役立つものであると言えそうである。

また、Q11 や Q12 の結果を見ると、当該教材が生徒の興味・関心を高め、ある課題へ取り組む動機づけを強くするのに役立つと考えられる。学校における様々な教育シーンで絵や写真などの視覚的補助教材 (visual aids) が用いられているが、ESD においても同様の教材の利用により学習効果を高めることが期待できる。

さらに、Q17 の結果に見られるように、当該教材は生徒の変容を促すことにも有用であると言えそうである。これは、当該教材が言語情報 (話し言葉・書き言葉にかかわらず) と視覚的情報を併せ持っており、直接的・具

体的なインプットによって生徒を刺激し、生徒の思考を活性化させる働きがあることによるものではないかと考えられる。

一方、Q5・Q7・Q10・Q13 の結果に見られるように、「質問する」「意見交換する」といったスキルの向上には直接的にはあまり影響を及ぼさないようである。しかし、これはおそらく、それらのスキルが教材によって高められるというよりは日頃の指導を通して高められるべきものであり、教材の内容だけでなく教材の使い方についても深く考えていく必要があるということを示しているのではないだろうか。

5. まとめ

本研究では、これまでの D&D の担当者が生徒に対して感じていた「ある事象 (問題) に対する視点が画一的になりがちである」「その事象 (問題) が社会の他の事象 (問題) とどのように関わっているかを十分に想像できない」という課題を解決するのに当該教材が有用であるという考えのもと、D&D の授業において当該教材を活用して地球的課題についての話し合い活動を行うという試行授業を実施した。その結果、次の 2 点が期待できることがわかった。

- 1) 当該教材を利用することによって、生徒の統合性・文脈化の能力を高め、生徒の変容を促すことができる。
- 2) 当該教材は地球的課題に対する生徒の興味・関心を高め、課題へ取り組む動機を高めることができる。

今後の課題としては、教材の入手可能性を高めることもあるが、なんといっても多くの教員が多くの機会において実践例を積み、情報交換をしながらより効果的な指導方法を考えていくことであろう。今回は学校設定科目という比較的自由度の高い授業での実践を行ったが、他の各教科で、「総合的な学習の時間」で、あるいは教科間連携などの取り組みにお

いて多様な形で当該教材が用いられていくことにより、当該教材の可能性・有用性がさらに高まり、当該教材が ESD の実践・発展に大きく寄与するものと確信する。

謝辞

本研究は、平成 23・25 年度科学技術研究費補助金（基盤研究（C））『国際理解教育・国際教育協力のためのデジタル紙芝居教材の構築法に関する研究』（研究代表者：村松隆）として実施された。当該教材の開発と利用については、三好直子氏（JOCV 環境教育技術顧問）、吉川まみ氏（JOCV 環境教育技術専門員）、今野良祐氏（筑波大学附属坂戸高等学校教諭）、Alexander Compter 氏（筑波大学附属坂戸高等学校外国語指導助手）から貴重な助言をいただいた。この場を借りて謝辞を表す。

引用・参考文献

- 石井克佳，2005，「エネルギー教育実践校 3 年間の取り組み」，『研究紀要』42:45-52，筑波大学附属坂戸高等学校。
- 石森広美，2012，「学校設定科目『グローバルシティズンシップ（GC）』の成果と課題～生徒は授業から何を学んだのか～」，第 49 回全国国際教育研究大会・分科会 4 発表（主催：全国国際教育研究協議会）。
- 工藤泰三・石井克佳・中村徹・小林美智子・平野延行・岡聖美・松井一夫・竹内義晴・建元喜寿・今野良祐，2012，「平成 23 年度国際教育推進委員会活動報告」，『研究紀要』49:53-60，筑波大学附属坂戸高等学校。
- 工藤泰三・塗田佳枝，2013，「科目『国際社会』の開発～国際的視野を持った生徒の育成を目指して～」，『研究紀要』50:79-96，筑波大学附属坂戸高等学校。
- 今野良祐，2012，「『地理 A』における ESD 実践報告～新科目『Global Studies』を見

据えて～」，『研究紀要』49:93-102，筑波大学附属坂戸高等学校。

UNESCO, 2012, Shaping the Education of 15 Tomorrow, 2012 Report on the UN Decade of Education for Sustainable Development, 17 Abridged, UNESCO, Paris, France.